園番号　７１９

令和６年度　奈良市立伏見こども園　研究実践概要

園長名　馬路　有理
全園児数　　１６０名

１．研究主題

つながりが育む豊かな心～ひと・もの・こととの関わりを通して～

２．研究年度

初年度

３．研究主題設定理由

入園すると家庭、地域から園へと子どもの世界は広がっていく。その世界とは、子どもが様々なひと・もの・ことに出会い、好奇心や探究心を呼び起こさせながら関わり、見方、捉え方を広げていく過程であり、その過程が子どもの心を豊かにしているのではないかと考えた。また、ひと・もの・こととの関わりは、その一瞬の子どもの興味、関心だけでなく、それまでの体験や経験、ひと・もの・こととのつながりの中でさらに広がっていくのではないかと捉え、主題を設定した。

４．具体的な研究内容

①研究のねらい

・子どもがひと・もの・こととの関わりを通して、心を動かされている姿を捉え、その要因を探ることで、その時の保育者の関わりや環境の意味を明らかにし、豊かな心を育む保育について考える。

②研究の重点

・子どもが心を動かした姿に着目し、その心の動き（思い、感情、気付き、思考等）を取り出し、その要因（ひと・もの・こと）について職員間でカンファレンスを行い、探る。

・心を動かされた要因となるひと・もの・ことについて、各学年の特徴、つながりを捉える。

③活動の方法

３・４・５歳児、１年間の実践事例から子どもが心を動かした姿を捉え、その要因を抜き出し、ひと・もの・ことの視点から分析する。さらに、それを年齢毎に示す（図１）。

子どもの心が動いた要因　　要因（ひと・もの・こと）　　子どもの心の動き

事例１「音がする！」　３歳児　１１月

前日に①プラスチック容器の中にドングリを入れて振ると「音がする」と驚く姿が見られた。何度も振り、音を鳴ることを繰り返し楽しんでいた。

翌日、保育者が遊びの場に前日よりいろいろな種類の素材を置いておくと、A児がペットボトルを手に取った。②何気なく机を叩くと「ポン」と軽い音がしたことに、A児「わぁ、ペットボトルでも音がする」と気付き、近くにあったいろいろなものを叩いて音を鳴らし始めた。Ⓣ「叩くと音がするんだね」とA児の気付きを言葉にしながら、③音が鳴りそうな金ダライなどを近くに持って来て一緒に叩く。大きな音が鳴りだすと周りで遊んでいた子ども達は音のする方を向き、遊んでいる手を止め近づいた。叩いている友達の様子を見て④ラップ芯やヤクルト容器など、近くにあるものを使って友達と一緒に一つの金ダライを叩くと大きな音が鳴り「本当だ。音がする」と嬉しそうに話し、友達と同じ場で何度も音を鳴らすことを楽しむ。

①ドングリを入れて振ると音が鳴った（こと）

音がする（驚き）

②叩くと瞬時に音がした（こと）

叩いても音がするんだ（気付き）

③・金ダライを叩くと鳴る大きな音（もの）
・楽しそうに遊ぶ保育者と友達（ひと）

私たちもやってみたい（興味）

＜考察＞

・安心できる存在の保育者がＡ児と音を鳴らして遊んでいたことで、音に反応を示した友達も遊びに加わりやすかった。一つの金ダライを囲んで鳴らすことで距離的に近くにいる友達の存在を感じることができた。また、その友達と同じ行為をする楽しさを感じやすく何度も鳴らす姿につながった。

・鳴らすことを楽しんでいるＡ児の姿に合わせて用意した金ダライが、子どもの力でも大きな音が鳴ったことで周りの友達の耳にも届き興味をもつようになった。

・容器に入れて振ったり、ものを叩いたりするなど、自分がした行為に対して、「音が鳴る」という反応が瞬時に返ってくることで驚きや面白さを感じた。叩く人や叩くためのものが変わっても同じように音が鳴ることで、友達と同じ場で同じことをする楽しさを感じて、音を鳴らす姿につながったと考える。

④・同じ場で同じように音を鳴らす友達（ひと）
・大勢で叩くことができる金ダライ（もの）
・誰が叩いても同じように音が鳴る（こと）
・違う素材を使って叩いても大きな音が鳴る（こと）

友達の近くで一緒のことをするって楽しい（楽しさ）（嬉しさ）

事例２「音が聞こえるよ」　４歳児　１０月

トイのコースとホースのコースを繋げ、土を被せて長いコースをつくって遊んでいた。水がトイからホースを通り、ホースの先に被せていた土から出てくると、今までは水を流すことに夢中だった①Ｂ児がホースの先から出てくる水の音を聞いて「『チョロチョロ』って音がする」と、水の流れる音に興味をもち何度も水を流した。それぞれの場所で流していた子ども達もホースに近づき②繰り返し水を流しながらＢ児の発見した音を聞き、Ｃ児「小さいけど音がする」①「本当だ、音がするね」と耳を澄まし、③気付きに共感していた。Ｃ児の声を聞いて、トイをパイプに入れ水を流し入れていたＤ児が「こっちも音がするよ」と友達に知らせた。④「こっちは『コポコポ』って音がする」と、Ｄ児は水の流れが目に見えないパイプの中から聞こえる音を伝えた。Ｄ児の話を聞きホースの近くで音を聞いていた子ども達はパイプに耳をつけると「ここから音がするんだ」「ホースとは違う音がする」と、⑤パイプの中から聞こえる音とホースの先から出てくる音との違いに気付き何度も確かめ伝え合った。Ｅ児も「音を鳴らしてみたい」と、⑥コップに水を入れパイプに流しながら音を聞いたが、「『コポコポ』って鳴らないよ」とＥ児が不思議そうにしていたため、⑦Ｄ児が「もっと水がいるんだよ」とＥ児に伝えた。水の量が少ないと思うように音が鳴らないと知ったＥ児はＤ児に「『コポコポ』が聞きたいから何回も流して」と言い、パイプに耳を当てると、パイプの中を流れる目に見えない水の流れや『コポコポ』と音がする様子を確かめていた。

①ホースの先から出てくる水の音（もの）

音が聞こえた（発見・興味）

②・音を発見した友達（ひと）
・繰り返し水を流し、音を聞いたこと（こと）

小さいけど本当に音が聞こえる（確かめる）

③Ｂ児の気付きに共感している友達や保育者（ひと）

パイプからも音がする（新たな発見）

④・目に見えない水の流れる音を伝えた友達（ひと）
・パイプに耳をつけて聞いた（こと）

ホースとは違う音がする（比べる）

⑤２か所の音を確かめている友達（ひと）

音を鳴らしてみたい（意欲）

⑥・コップに水を入れて流す（こと）
・パイプから聞こえてくる音（もの）

どうして鳴らないのだろう（疑問）

⑦・水の量を増やすと音が鳴る（こと）
・音を鳴らす方法を知っている友達（ひと）

音を聞きたいから水を流してほしい（欲求）

＜考察＞

・友達や保育者の発見を伝えたり、共感したりする声が、同じ場ではあるが離れている子どもの耳に入り、音に耳を傾けるきっかけとなり、音に興味をもつようになった。水の流れや音の発見を言葉にすることで共有できるようになっていた。友達が音を聞き確かめている姿から音を鳴らしてみたいという意欲につながった。

・初めは水の流れを楽しんでいたが、水の音を発見したことで興味が変わっていった。ホースやトイ、パイプなど様々な素材の異なるものを使い、コースつくりをしたことで、ホースとパイプの音の違いに気付いたのではないかと考える。

・ホースとパイプから聞こえる水の音を確かめようと繰り返し水を流し、音に耳を傾けることで、音の違いに気付いたり、比べたりする姿になった。音から目に見えない水の流れを感じながら繰り返す中で、思うような音にするためには、水の量が関係していることを知った。

事例３「“地球グミ”をつくりたい」　５歳児　１１月

９月頃から「さら砂に色をつけたい」と、絵の具やコンテで色付けをしたり、さら砂を固めたりして繰り返し遊んでいた。

１１月下旬、さら砂と削った青いコンテを混ぜてＦ児がつくった①きれいな青いさら砂を見て、「地球グミの色みたい」と言ったＧ児のつぶやきを聞き、Ｈ児は「地球グミをつくりたい」と話した。その日の②振り返りで、「地球グミとは、まんまるで青くて中にイチゴジャムが入ってる」ということや「まんまるは半分の丸と半分の丸をくっつけたらいい」とつくる方法を出し合った。

次の日、Ｈ児とＩ児がさら砂づくりに必要な道具を持って来て、「地球グミつくろう」と青いさら砂と赤いさら砂をつくり、「これで半分の丸ができそう」と、ガチャガチャのカプセルに詰め込んで半分と半分を合わせてつくる方法を試そうとしていた。③カプセルの小さな穴を見つけ、穴から砂が落ちることを予測し、穴をビニールテープでふさごうと考えた。Ｈ児「そのまま貼ったらベタベタ（粘着面）に砂がついちゃうからそこにもテープを貼ろう」Ｉ児「そうしよう」と言いながら、カプセルにテープを貼っていた。テープを貼ったカプセルに青いさら砂、赤いさら砂をスプーンで押しながら順にギュッと詰め込み、「④今日はすぐできないから置いておいて、明日固まったらカプセルから出してボンドでくっつけよう」と、乾燥させて固まるように大事に置いた。

翌日カプセルに入れたさら砂を見たＨ児は「まだ固まってないな」と置いておき、２日後、Ｈ児「もう固まったかも」とＩ児と一緒にカプセルからさら砂を取り出すことにした。⑤ひっくり返しただけでは塊が出てこなかったため、まな板の上で優しくコンコンと叩いてみたりアイスの木の棒をカプセルとさら砂の隙間にそっと入れてみたりすると、ポロっとさら砂の塊が出てきた。⑥赤いさら砂はきれいに半球状に固まって出てきたが、青いさら砂はカプセルに張り付いてうまく取れなかった。「あぁ」と残念な声を上げたＨ児とＩ児だったが、赤いさら砂の塊同士を合わせてみて、⑦Ｈ児「あんまり丸くないから、ちょっとさら砂が少なかったのかも。もう一回つくろう」Ｉ児「うん。僕は青つくるな」と塊を崩してもう一度、赤と青のさら砂をつくり始めた。

①・コンテで色付けした青いさら砂（もの）
・「地球グミの色みたい」とつぶやいた友達(ひと)

地球グミをつくりたい（願望）

②・地球グミのイメージやつくり方を出し合える友達（ひと）
・つくる方法を共有した（こと）

地球グミをつくろう(意志)

③・カプセルの小さな穴（もの）
・テープの粘着面に砂がつく（こと）

この方法ならできる(確信)

④固まるには時間がかかる（こと）

明日にはできるかな（期待）

まだできないな（確認）

⑤カプセルからさら砂が出てこない（こと）

うまくいかない(つまずき)

他の方法でやってみよう（試行錯誤）

⑤さら砂の塊が取り出せた（こと）

取れてうれしい（喜び）

⑥塊が出てきたが、思い通りの形に取りだせなかった（こと）

思い通りじゃなかった（つまずき）

⑦・思いや目的を共有する友達（ひと）
・原因を予想する（こと）

もう一回やってみよう（再挑戦）

＜考察＞

・５歳児は、その場にいなくても“地球グミ”というキーワードだけで、そのイメージが言葉で共有できるようになってきている。遊びの後の振り返りでは、そのイメージを明確にしたり、どうやってつくるか考えを出し合ったりしたことで、目的に向かう道筋を見出すことができた。その共有された目的やイメージは同じ場でつくる友達の存在（その場の意見や同調）があることでより明確になり、目的に向かう意欲が高まっていった。

・青いさら砂の色からイメージが広がり、地球グミづくりが始まった。地球グミのイメージに合う色のさら砂や、形の特徴である球体を再現できそうなカプセルなど、つくるために必要なものを自分たちで整えたり使ったりしていた。今までの経験から、さら砂やものの特性がわかり「穴があると砂が落ちるからふさがなければならない」と予測し、最適な方法を考え実践しながら遊ぶ姿につながった。

・地球グミのイメージやつくり方を共有したことで「地球グミをつくりたい」という思いが目的となった。経験上、さら砂は固まるまで時間がかかるが、待てば固まるという見通しが期待となり、納得するまで待つことができ、次の段階へ進むことにつながった。思い通りの結果ではないというつまずきがあっても原因を予想し、「次はこうしてみよう」とワクワクしながら再挑戦していた。経験の積み重ねが目的に向かう意欲や試行錯誤の支えとなっていたと考える。

図１　子どもが心を動かされた要因　（ひと・もの・こと）

	3歳児	4歳児	5歳児
特徴	○いろいろな気持ちを経験して感情を蓄える	○経験したことを言葉や行動に出すことで新たな気持ちを表す ○知識を獲得する	○思いや目的を実現するために経験から先を想像し試行する
ひと	・感じたことや思いを受け止めてもらえる保育者 ・きっかけをつくる保育者 ・安心できる存在の保育者 ・自分と同じことをしている友達 ・「同じ」を感じられる距離にいる友達	・安心して思いを出せる友達や保育者 ・自分と同じように受け止めてくれる友達 ・様々な手段で遊ぶ友達 ・近くにいる友達 ・自分の思いや気付きを伝えられる友達 ・自分の思いや気付きに共感する友達や保育者 ・声が聞こえる距離にいる友達 ➢やっていることに目を向けられる	・同じ遊びの場で、それぞれの目的をもって遊んでいる友達 ・気付きや考えを出し合える友達 ➢イメージを共有したことで目的が明確になり方向性が定まっていく ➢その場、ものがなくても言葉で共有する
もの	・ものそのもの ・身近にあるもの ・自分がした行為に対して反応が分かりやすいもの	・様々な使い方ができるもの ・目に見えないが感じられるもの ・使い方によって変化があったり、変化が生まれたりするもの ➢今までの経験から様々なものを使うことで違いや共通点、特性に気付く ➢一人一人がそれぞれの使い方、遊び方をするなかでそれぞれの気付きがある	・調整したり、組み合わせたりできるもの ・今までの経験や知識、情報から選択、必要と考えたもの ➢今までの経験や知識、情報から必要だと思ったものを選んだり、整えたりする
こと	・目に見える、すぐ目に入ってくること ・すぐに反応や結果が分かること ・共通する言葉や行為 ➢心(思い・気持ち等)が通じ合っているように感じている	・自分とは感じ方、気付き、考え等が違うこと ➢思っていたことは違ったり、疑問を感じたりしたときに友達の声、友達の存在が乗り越えられるきっかけや乗り越える力になりつつある ・目の前の目的の出現 ・ものに対する経験や知識 ➢「～したい」「～するためには…」という思いを実現するには今までの経験を活かしながら考えたり試したりする	・命・社会 ・生活経験 ・大きな目的(方向性)の出現・共有 ➢大きな目的(方向性)に向かって予想や見通しをもって試行錯誤するようになる 予想、見通し→試行錯誤→結果→評価(原因を探る)→思い通りでなくても再挑戦できる

５．研究の成果

３～５歳児の事例から子どもが心を動かされた要因をひと・もの・ことの視点で分析し、次のことが分かった。

『ひと』との関わりでは、保育者という安心できる存在が基盤となり、興味を惹かれたものを介して友達へと視野が広がっていた。その視野が広がるきっかけは、安心できる保育者や友達の距離的な近さ、言葉によるものであったと考える。そして、友達に興味・関心をもったことで、保育者から友達へと心の拠り所の対象が増え、より行動範囲が広がるとともに、視野も広がっていったと言える。

『もの』との関わりでは、まず、ものの用途を決めずに存分に関われる環境があることで、そのものに関わりその反応を楽しむようになった。そのような存分に関わる経験の中で、ものの特性を感じたり気付いたりし、選び、組み合わせるようになっていった。そして、様々なものと関わりの中で、使い方による違いに気付き、それは知識として蓄積されていった。ものとの関わりで得た知識はこととつながる手段となっていくことも分かった。

『こと』との関わりでは、自分がした行為に対して目に見えてすぐに反応や結果が分かることで自分の行為と結果の関係性に気付いた。友達のしていることへと興味が広がると友達と同じことをしたときに自分と友達がしたことの結果が違うことに気付くようになった。その気付きは、疑問や目的が生まれるきっかけとなり、事象への興味の深まりにつながった。また、様々な経験を積み重ねる中で目の前の予想や見通しがもてるようになると、目の前のことだけでなく時間的な見通しや期待をもつようになった。さらに事象への興味の深まりは、目の前にある事象から社会生活、命、数量など目に見えない概念へと広がっていた。

このように子どもは、自分の身の回りのひと・もの・こととの関わりを通して、目の前の興味のあるものから目の前にないもの、目に見えないものへと視野を広げ、自分自身でひと・もの・こととの新たな関係をつくりだしながら自らの世界を広げていた。そして、それは、ひと・もの・こと、それぞれに単独に関わるのではなく、絡み合い、つながることで広がっているということが分かった。今後、そのつながりを意識し、子どもの世界を読み取りながら、保育者が環境や関わり方を考えていくことで、さらに子どもが豊かに心を動かす保育を可能にすると考える。

６．今後の課題

本研究では、子どもが心を動かしたひと・もの・ことに着目し、そのつながりの重要性に気付いた。今後は、遊びだけでなく生活にいかにつながっているのか検討し、保育の充実を図りたい。また、子どもの心（思い、感情、思考等）についての検討が不十分であったため、つながることでどのように豊かになるのか明らかにしていきたいと考える。